

第13回ユネスコスクール全国大会 持続可能な開発のための教育(ESD)研究大会

抄録

[日時]令和3年11月27日(土)

[会場]オンライン開催

主催：文部科学省／日本ユネスコ国内委員会

共催：NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム／国立大学法人宮城教育大学

協力：公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター／公益社団法人日本ユネスコ協会連盟
日本出版クラブ／民間教育研究所連盟

後援：(予定)外務省、環境省、全国連合小学校長会、全日本中学校長会、全国高等学校長協会、全国国公立幼稚園・こども園長会、日本私立大学協会、(一社)日本私立大学連盟、日本私立中学高等学校連合会、日本私立小学校連合会、全日本私立幼稚園連合会、(公社)日本PTA全国協議会、全国国立大学附属学校連盟、(一社)国立大学協会、ユネスコスクール支援大学間ネットワーク(ASPUivNet)、ESD活動支援センター、日本ESD学会、(株)教育新聞社

協賛：カシオ計算機株式会社、株式会社ファーストリテイリング、株式会社三菱UFJ銀行

第13回ユネスコスクール全国大会/持続可能な開発のための教育 (ESD)研究大会 開催に寄せて



文部科学大臣 末松 信介

第13回ユネスコスクール全国大会(ESD研究大会)の開催に当たり、御挨拶申し上げます。

教職員を始め学校関係者の皆様におかれましては、日頃より、教育活動に御尽力をいただいていることに加え、この1年半以上は、新型コロナウイルス感染症対策を講じながら子供たちの学ぶ場を守って来ていただいたことに、心より感謝申し上げます。

今、人類は、新型コロナウイルス感染症との闘いに加え、気候変動、生物多様性や天然資源枯渇などの地球規模の課題に直面しています。これらは地球上の誰もが避けて通ることのできない人類一人一人が抱えている課題です。「自分たちが社会の課題にコミットしなければ、自分たちの未来が脅かされる」という危機感は、先だって行われたCOP26においても各国のリーダーから表明されました。世界的な課題を「自分事」としてとらえ「持続可能な社会の創り手」の育成を行うESDは、世界の標準となっていく教育といえます。

本年5月に開催され、161か国2,800名が参加した「ESDに関するユネスコ世界会議」を機に、ESDはSDGsの17の目標の全ての実現に寄与するものであるとした国際的枠組み「ESD for 2030」が本格的に始動しました。日本が提唱したESDが世界の教育をけん引することを大変喜ばしいと思うと同時に、皆様の長年にわたるESDの取り組みに改めて感謝する次第です。

国内においては、「持続可能な社会の創り手」の育成が盛り込まれた新学習指導要領の本格実施が始まりました。ユネスコスクールにおけるESDは、学校のICT環境を整備するGIGAスクール構想の下、次世代の社会を見据えた取り組みが行われております。例えば、「持続可能な開発のための国連海洋科学の10年」を踏まえ、海洋を題材として国内外の学校同士がオンラインで議論し、子供たちが社会課題の解決に向けて自ら行動に移すなどユネスコネットワークを活用したESDの取組が実施されていると聞いております。我が国のESDは、2030年に向けて新しいフェーズを迎えており、教育再生の核(コア)となることを期待します。

本大会を通して、全国で実践いただいているユネスコスクールの優れた取り組みや課題に応じた工夫を共有し、教員やESDに携わる多様なステークホルダーのネットワークが強化され、更なる活動の充実に資することを祈念しております。

第13回ユネスコスクール全国大会/持続可能な開発のための教育 (ESD)研究大会 開催に寄せて



日本ユネスコ国内委員会会長
濱口 道成

第13回ユネスコスクール全国大会(ESD研究大会)の開催に当たり、御挨拶申し上げます。

ユネスコスクール関係者の皆様におかれましては、日頃よりESDをはじめとするユネスコ活動の推進に御尽力いただき誠にありがとうございます。

我が国は、本年、ユネスコ加盟70周年を迎えました。ユネスコは、戦後の荒廃の中で、日本が初めて加盟した国際機関です。民間の草の根活動から始まったユネスコ活動は、日本が国際社会への復帰となる希望となりました。それから、70年に渡り、ユネスコが掲げる「国際平和と人類の共通の福祉の促進」のもと、我が国は、教育・科学・文化の多岐に渡る分野において、国内外で着実にユネスコ活動を広げてきました。

気候変動や国際秩序の変化、サイバーテクノロジーなどの急速な進歩に加え、コロナ禍が長期化していることにより、今、人類は激動と混迷の中にあると言えます。このような時こそ、人々が物理的な隔たりを乗り越え、無知・偏見をなくして相互に理解し、連帯・協調することが大切です。

「人の心に平和のとりで」を築き、人類の共通の福祉を促進し、持続可能な社会の構築を実現するというユネスコ活動は、困難な時代を乗り越える“世界の希望”になると信じております。

ユネスコスクールは、ユネスコの理念に基づき、時代に合わせて、多様な教育を展開してきました。本年は、東日本大震災から10年の年でもあります。古来、自然災害を多数経験して来た日本は、自助・共助・公助(自分で助ける、共に助け合う、そうして公の助けを待つ)を教育の中で育み、科学への理解が定着していることが、社会の礎になっています。本大会において、災害からの復興にESDの取組やユネスコスクールのネットワークがどのように活用されたかを改めて振り返るとともに、現在の社会的な課題を自分の課題として捉え、「明日を拓くための教育の在り方」へとつなげていく議論が活発に行われることを期待しています。

持続可能な社会を目指し、文部科学省と日本ユネスコ国内委員会がESDの推進拠点と位置付けるユネスコスクールの役割の重要性は、年々高まっています。本大会を通じた、ユネスコスクールネットワークのより一層の活性化を祈念しております。

第13回ユネスコスクール全国大会／ESD 研究大会 抄録

開会式 10:00～10:20

- ▼末松信介（文部科学大臣）
- ▼濱口道成（日本ユネスコ国内委員会会長）
- ▼特別メッセージ：さかなクン（日本ユネスコ国内委員会広報大使）
- ▼村松隆（宮城教育大学学長）

基調提案・パネルディスカッション 10:20～11:50

大震災から明日を拓く教育の在り方を探る

—— ビフォー311・アフター311から学ぶ——

東日本大震災の10年目に当たる今年、ユネスコスクールの多い地域である東北において、災害から立ち直り、新たな未来を目指す取り組みにESDがどのように貢献したか探り、その成果を共有することで今後の「持続可能な社会の創り手」の育成につなげます。

- 畠山三弘（宮城県気仙沼市立気仙沼小学校教諭）
- 榎木千枝（宮城県気仙沼市立大谷小学校教諭）
- 三浦美咲（宮城県気仙沼市立大谷小学校教諭）
- 小松美咲（宮城県気仙沼高等学校1年／ビデオ収録による発表）
- 末永詩真（宮城県気仙沼高等学校1年／ビデオ収録による発表）
- 阿部蓮（宮城県気仙沼向洋高等学校1年／ビデオ収録による発表）
- 基調提案・パネルディスカッション司会：市瀬智紀（宮城教育大学教授）

総括：見上一幸（前宮城教育大学学長、尚絅学院大学特任教授）

企業が行う教育支援や社会貢献に関する情報提供 12:00～12:45

企業	テーマ
株式会社三菱 UFJ 銀行	サステナビリティへの取り組み
株式会社ユニクロ／株式会社ジーユー	“届けよう、服のチカラ” プロジェクト
NPO法人いのちの教室	「いのちの授業」の取り組み

ユネスコスクール地方ブロック大会からの報告 12:45～13:00

関東ブロック：山本剛大（東京都成蹊小学校教諭）

第13回ユネスコスクール全国大会／ESD 研究大会 抄録

文部科学省からの施策説明 13:00～13:10

田口康（文部科学省国際統括官）

特別座談会 13:10～14:25

わが国におけるユネスコの功績、SDGs達成に向けての役割

日本のユネスコ加盟70周年を記念して、わが国でユネスコ活動が果たしてきた役割とその功績を共有するとともに2030年の社会と教育を想定したESDの今後を展望します。

安西祐一郎（前日本ユネスコ国内委員会会長、慶應義塾大学名誉教授）

末吉里花（日本ユネスコ国内委員会広報大使、一般社団法人エシカル協会代表理事）

安田昌則（前福岡県大牟田市教育委員会教育長）

司会進行：杉村美紀

（日本ユネスコ国内委員会教育小委員会委員長、上智大学総合人間科学部教育学科教授）

研究協議会 14:40～16:50

研究協議会	テーマ	コーディネーター
研究協議会① ～第一会場～	ESD推進による令和の日本型学校教育の構築	石丸哲史（福岡教育大学教授）
研究協議会② ～第二会場～	「学び」の先に見える“可視化未来”と自己	伊井直比呂（大阪府立大学教授）
研究協議会③ ～第一会場～	学校の実践、取り組みを評価し、成果を広める	棚橋乾（全国小中学校環境教育研究会顧問）
研究協議会④ ～第二会場～	ユースの活動と国際交流 —Voice of Youth Empowermentの事例から	公益財団法人アジア・ユネスコ文化センター（ACCU）

閉会式・ESD大賞授賞式 17:00～17:20

第12回ESD大賞表彰式

文部科学大臣賞賞状読み上げ：田口康（文部科学省国際統括官）

講評：手島利夫（第12回ESD大賞審査委員長代理、日本ESD学会前副会長）

御礼：東京都渋谷教育学園渋谷中学校・高等学校（ビデオ出演）

閉会挨拶：木曾功（NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム理事長）

閉会の言葉：堀尾多香（文部科学省国際統括官補佐）

第13回ユネスコスクール全国大会／ESD 研究大会 抄録

基調提案・パネルディスカッション 10:20～11:50

大震災から明日を拓く教育の在り方を探る

—— ビフォー311・アフター311から学ぶ——

【基調提案】

東北地方では、ユネスコスクールへの広域的な加盟が展開しはじめて間もない2011年3月11日に東日本大震災を経験した。震災と同時に、国内外ではユネスコ関連も含めて支援のためのプロジェクトが数多く立ち上げられたが、世界的な連携による支援の意義は非常に大きく、遺児・孤児の支援など今日まで続いている。学校現場では東日本大震災の経験から、防災マニュアルの整備や防災教育の実践で著しい成果が見られ、防災主任の設置や地域自治会・町内会との連携、避難所の運営などにおいて、数多くの改善の提案がなされている。浸水した地域は、ひとたび更地となり、その後整備が進んだが、一方で、人口流出と学校統廃合などの地域の衰退が進行し、放射能汚染水の処理、海が見えない防潮堤の建設など、自然との共生場面で「持続可能性」の意義が問われるような大きな葛藤が生じている。

地震・津波、噴火や、気候変動に由来する自然災害、感染症による生物学的災害・パンデミックまで、幅広い種類の災害に直面する昨今の状況において、ユネスコスクールの学校実践においてそれらの災害に対応するための新しい教育的手法を創出することの意義について考えたい。

本基調提案の最後では、ユース世代に向けて、震災ボランティアに関わり、現在ユネスコ本部で働いている宮城教育大学卒業生のメッセージを披露する。

【パネルディスカッション】

2011年3月11日に東日本大震災が発生したときに、登壇者の畠山三弘先生は、神奈川県川崎市の教員で、榎木千枝先生は南三陸町名足小学校の教諭、三浦美咲先生はその小学校で学ぶ6年生だった。その後、畠山先生は故郷に戻って教員となり、三浦先生は防災教育について学んだのち教員となった。3名は震災を経験する中で、強い使命感をもって、今日までユネスコスクールで防災教育に取り組んでいる。

気仙沼市では、防災主任が学校種を越えて相互に学ぶシステムが構築されている。また、各学校では地域と連携した取組が進んでいる。また、「防災学習シート」など独自の教材開発が行われている。個人でも教科の単元と「防災教育」を結びつけた実践が行っている。本パネルディスカッションでは、気仙沼市として、各学校として、教員として教科の中で行っている取組について紹介することで、参加者の参考に供したい。

登壇者の学校ではユネスコスクールとして、地域の多様な人的リソースや物的リソースを最大限に活用しながら人材育成を行っているが、防災教育のみにとどまらず、ESDによる地域に根差した人づくりが、災害時などの緊急時に大変有効であることについて言及する。

なお、パネルディスカッションでは、震災遺構で語り部活動をしている高校生、小松美咲・末永詩真さんおよび、「防災キャンプ」を企画した高校生の阿部蓮さんが、ボランティア活動の中から得た経験をもとに、ユースに向けたメッセージを披露する。

株式会社ファーストリテイリング

“届けよう、服のチカラ” プロジェクト

[概要]

“届けよう、服のチカラ” プロジェクトは、ユニクロ・ジーユーなどを展開するファーストリテイリングが、世界の難民問題の解決のために取り組む、参加型学習プログラムです。

1 子どもたちが身近な「服」を通じて難民問題や環境問題に関心を持つきっかけを作る

2 「自分にもできる社会貢献がある」と気づき、自ら行動する機会を提供する

3 服の回収の呼びかけ等を通じて地域社会とつながる機会を提供する

の3点を目的とし、活動内容は「出張授業」と「子ども服の回収活動」の2つのパートで構成されます。従業員が講師を務め、「服のチカラ」と社会問題の1つである難民問題を、SDGsと紐づけて解説します。子ども服の回収活動では、回収方法を児童生徒が自由にアイデアを出し、計画・実行することで、考え抜く力、チームで働く力など、社会人基礎力を養うことができます。回収された子ども服は、UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）を通じて世界中で服を必要とする子どもたちに届けています。



<問い合わせ先>

FRJP-CRSocialInnovation@fastretailing.com

株式会社三菱 UFJ 銀行

サステナビリティへの取り組み

[概要]

MUFG では、「持続可能な環境・社会が MUFG の持続的成長の大前提である」と考え、環境・社会課題の解決と当社の経営戦略を一体と捉えた事業運営をめざしてまいりました。

わが国は少子高齢化や人口減少等の課題を抱え、世界的にも低成長が常態化しつつあります。また、足元では新型コロナウイルス感染症の影響や環境・社会課題への意志の高まり、デジタル技術進展に伴う異業種の金融事業への新規参入等、当社を取り巻く経営環境は過去に例を見ない速さで大きく変化しています。当社は、この変化を正しく読み解いたうえでそれを飛躍のチャンスに変え、新しい時代において社会をリードする存在でありたいと考えています。このたび、「世界が進むチカラになる。」を当社の存在意義（パーパス）として設定し、お客さま・株主・社員をはじめとする全てのステークホルダーの期待に応えてまいります。

サステナビリティ経営では、世の中からの期待と、MUFG の事業領域との親和性の両面から、MUFG として優先的に取り組む 10 課題を特定しています。これら 10 の課題を起点に事業戦略、リスク管理、社会貢献活動を推進し、環境・社会課題の解決に貢献していきます。

また、MUFG では、グループ業務純益の 1%相当を社会貢献活動に拠出する寄付プログラムを 2020 年度にスタートし、社会貢献の取り組みを拡充しました。本業を通じた対応だけでは中々手の届きにくい領域についても、課題解決に向けた貢献の幅が広がっています。

そして、持続可能な社会の実現・維持には次世代の育成が欠かせないと考え、2009 年より、日本ユネスコ協会連盟さまと協働で「ユネスコスクール SDGs アシストプロジェクト」を開始いたしました。私たちは、社会機能の維持に不可欠な金融インフラを守るとの使命のもと、これからも皆さまの期待に応えてまいります。

<問い合わせ先>

株式会社三菱 UFJ 銀行 経営企画部 ブランド戦略 Gr TEL : 050-3844-2649

第13回ユネスコスクール全国大会／ESD 研究大会 抄録

企業への質疑応答 12:00～12:45～企業が行う教育支援や社会貢献に関する情報提供～

NPO 法人いのちの教室／協賛カシオ計算機株式会社

「いのちの授業」の取り組み

[概要]

カシオ計算機に在籍中、命の視点で持続可能な社会の実現に寄与すべく立ち上げた出前授業：「いのちの授業」は、2019年10月24日現在で、小、中学校を主体に、延べ640機関（幼稚園～大学、行政、PTA、地域社会からの講演等々）、74,000人を数えています。カシオ退職と同時（2016年）にNPO法人を立ち上げ、現在に至っております。過去、全国の多くのユネスコスクール様からもご要請をいただいております。本授業は、生徒さん方が一緒に参画し、且つ、授業を構成する主体的な立場に立って、自ら考え、気づきを持っていただく場としております。そのため、幾つかの話（生きる意味、生きる価値、命の大切さ、絆、心の眼等々）をお伝えしますが、捉え方は生徒さんの心の在り方を尊重させていただきながら、心の中から大切な思いを引き出す授業としております。今後も、生徒さんの心の中に届く授業の実践に努め、広く社会に受け止めていただけるよう、積極的な活動を展開して参ります。



<問い合わせ先>

NPO 法人いのちの教室 理事長 若尾久 TEL : 055-225-6550

【研究協議会①】ESD推進による令和の日本型学校教育の構築

[概要]

社会が急速に変化し、予測困難となってきている中、令和の日本型学校教育の構築に向けては、これに対応できる子供たちの資質・能力を確実に育成する必要があるため、新学習指導要領の着実な実施が重要であるとされています。持続可能な社会づくりに傾注してきたESDはこれまで資質・能力に着目しつづけ、コンテンツのみならずこのようなコンピテンシーベースへの流れを牽引してきたといえます。

そこで、第8回ESD大賞文部科学大臣賞を受賞し、以降も多様なステークホルダーによる取組の評価を通じたESD実践の質の向上とともに、令和の日本型学校教育とESDを一体的に捉えて学習指導要領の着実な実施をめざしている大牟田市立吉野小学校に実践報告をいただきます。そして、教科横断的アプローチによるESDの実現モデルを確立された手島利夫先生からコメントをいただきながら、令和時代のユネスコスクールおよびESDをみなさんと考えてまいります。

コーディネーター：石丸哲史（福岡教育大学教授）

発表者：島俊彦（福岡県大牟田市立吉野小学校教諭）

【研究協議会②】「学び」の先に見える”可視化未来”と自己

[概要]

研究協議会②のテーマは、『「学び」の先に見える“可視化未来”と自己』とさせていただきます。これは、「学校教育を見据えたユネスコスクール活動への提言」より、観点①「行動につなげる」、観点②「各学校の成果等を学校間、地域、国内外へつなげる」を基に構成されたテーマです。今、全国のASPnet校では、ESDを踏まえたSDGsへの取組を「探究」の授業として実践されるようになってきました。さて、ここで重要なことは、取り上げられるSDGsの目標群は『課題の提示』で終わることなく、『具体的な未来の世界像』を明らかにしていることです。すなわち、その世界像に学習者が現実感をもって生涯にわたる長い達成プロセスを歩むためには「行動すること」を目的化するだけでなく、課題について学び、考え、そしてそれに基づいて自らが協働しながら地域や世界の具体的な未来の姿を可視化させることを目的とする必要があると考えられます。今回発表される大阪府立佐野高等学校は、実践の到達地点を「行動」から「可視化」へと移動させて取り組まれている様子を紹介いたします。

コーディネーター：伊井直比呂（大阪府立大学教授）

発表者：向井小雪（大阪府立佐野高等学校教諭）

研究協議会 15:50～16:50

【研究協議会③】学校の実践、取り組みを評価し、成果を広める

[概要]

杉並区立西田小学校は、コロナ禍でも生活科・総合的な学習の時間を中心として、発達段階に応じて各学年でテーマと育成を目指す資質・能力、価値観を位置づけ育成に取り組んでいます。特に今年度は来年に創立80周年を控え、地域とのつながりをこれまで以上に大切にしようと、地域支援本部の協力のもと学習活動に取り組んでいます。今回は6年生の総合を中心とした平和に関する学習について、経緯と子どもたちのワークシートを質的に分析することで、ESDとしてどのような資質・能力を育成したか報告します。また各種調査から、本校の数年間のESDに対する取り組みの成果を分析することで、カリキュラムや取り組みの評価を報告させていただき、皆さんでESDの成果と成果を読み取る評価について協議したいと思います。

コーディネーター：棚橋乾（全日本小中学校環境教育研究会顧問）

発表者：佐々木哲弥（東京都杉並区立西田小学校主任教諭）

【研究協議会④】ユースの活動と国際交流—Voice of Youth Empowermentの事例から

[概要]

持続可能な社会の実現に向けて、次代を担う若い世代の柔軟なアイデアや大胆な行動力がますます注目を集めるようになってきています。ユネスコスクールの主役ともいえる子どもたちは、今、何を考えどのような活動をしているのでしょうか？

本研究協議会では、ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）設立50周年事業として実施した中高生世代のための英語プレゼンテーションプログラム「Voice of Youth Empowerment」の参加チームが、自分たちの発信・行動・交流の経験とそこから得た学びについて語ります。また、彼らの活動を支える教員の視点も交えつつ、国内外の交流活動の意義や方策についても考えます。

ユネスコスクールは、その国際的なネットワークを活用した交流を通じて、学びを広げ連帯を深めることが期待されています。第12回ユネスコスクール全国大会における提言の3観点をふまえ、交流活動による学び合いの成果を、生徒たちの生の声から感じていただければと思います。

コーディネーター：公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）

発表者：大澤和仁（学校法人市川学園 市川中学校・高等学校教諭／Steppers）

吉岡百合奈（広島県山陽女学園高等部教諭／Piece of Peace）